

第248回 日本小児科学会兵庫県地方会

プログラム

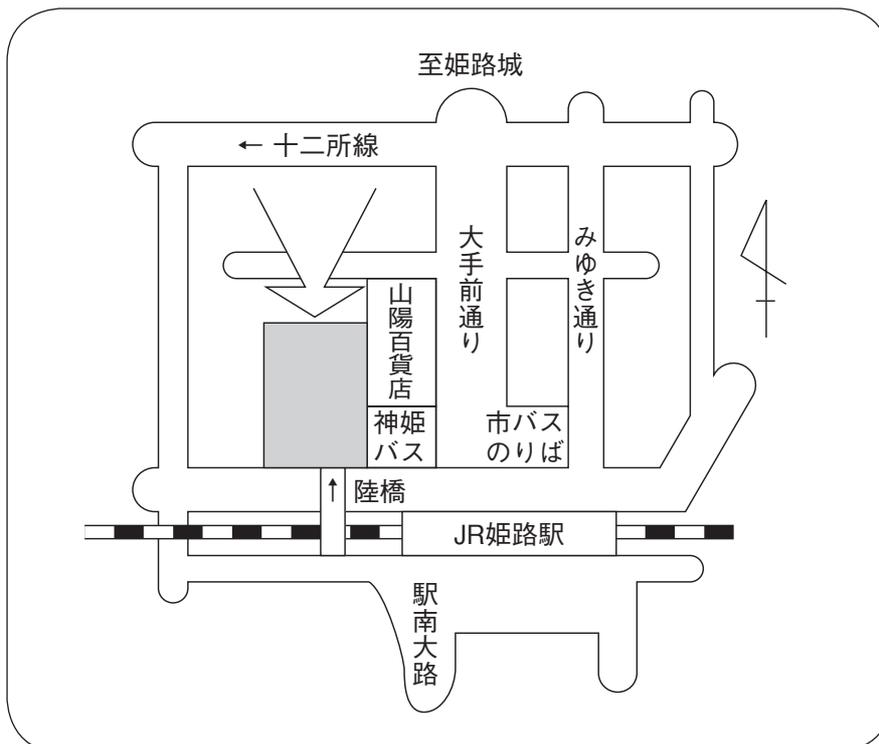
❖日時 平成21年9月26日(土) 13:00~

❖会場 姫路キャスパホール

TEL (0792) 84-5806

- 本地方会は、日本小児科学会認定専門医のための研修8単位です。
- 参加費として1,000円徴収いたします。
- 口演の発表時間は5分、討論時間は2分です。

■所在地図



一 般 講 演 (発表5分、質疑2分)

第1グループ (13:00~13:49)

座 長 森 沢 猛

1. MRI拡散強調画像で典型的な画像所見を呈した重症新生児低血糖の1例
兵庫県立こども病院周産期センター 新生児科 猪 俣 慶
2. 最近経験した非D Rh不適合による早発溶血性黄疸の2例
加古川市民病院 小児科 小 寺 孝 幸
3. 胎便性イレウスに対して穿孔前腸瘻造設を行った重症子宮内胎児发育遅延児
兵庫県立こども病院周産期医療センター 新生児科 山 下 達 也
4. 日齢14に発症した新生児甲状腺機能亢進症の1例
神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学 長 坂 美和子
5. 新生児期に発生したMRSA骨髄炎の1例
加古川市民病院 小児科 波多野 史 子
6. 心房粗動停止後に多源性心房頻拍を呈した非免疫性胎児水腫の1例
兵庫県立こども病院周産期医療センター 新生児科 小 川 禎 治
7. 新生児期より観察したSotos症候群の2例
兵庫医科大学病院 小児科 三 崎 真生子

第2グループ (13:49~14:31)

座 長 高 橋 宏 暢

8. 小児Helicobacter pylori感染症の非侵襲的検査の有用性
社会保険神戸中央病院 小児科 加 納 原
9. 潰瘍性大腸炎劇症型に対してステロイドパルス及び白血球除去療法を施行し外科手術を回避して軽快退院した1例
兵庫県立塚口病院 小児科 田 中 裕 也
10. 当院における胃食道逆流症例の検討
姫路赤十字病院 小児科 山 本 暢 之
11. 肉眼的血尿にて発症した腎原発悪性リンパ腫の1例
神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学 久保川 育 子
12. 溶血性尿毒症症候群発症8年後より高度蛋白尿を呈し、糸球体硬化および著明な間質の線維化を認めた1例
神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学 橋 村 裕 也
13. 点滴漏れにより皮膚壊死をきたした1例
姫路聖マリア病院 小児科 桑 村 紀 子

第3グループ (14:31~15:13)

座長 黒坂文武

14. 任意予防接種に関するアンケート調査
兵庫県小児科医会 感染症対策委員会 八若博司
15. 水痘ワクチンの効果に関する報告
— 保育施設内での水痘のアウトブレイクの経験から —
片山キッズクリニック 宮田一平
16. 卵アレルギー1歳0か月児に安全かつ確実にMRワクチン接種を受けてもらうために
神戸市立医療センター中央市民病院 小児科 清水滋太
17. 食物負荷試験中にアナフィラキシーショックを呈しエピペンで救命しえた1例
兵庫県立こども病院 アレルギー科 救急科 安部信吾
18. 未就学児に負荷試験で確定した食物依存性運動誘発アナフィラキシーの1例
神鋼病院 小児科 梶山瑞隆
19. トシリズマブ投与中に感染症を反復した全身型若年性特発性関節炎の1例
兵庫県立こども病院 リウマチ科 中岸保夫

————— 休 憩 (15:13~15:25) —————

第4グループ (15:25~16:14)

座長 岡藤隆夫

20. 当院で経験した新型インフルエンザ小児例
神戸市立医療センター中央市民病院 小児科 宮越千智
21. 西神戸医療センターにおける新型インフルエンザ対応の経過報告
西神戸医療センター 小児科 上村克徳
22. 新型インフルエンザアウトブレイク第1週の小児科医院における外来診療の実情
片山キッズクリニック 宮田一平
23. 新型インフルエンザ発症の母親と濃厚接触した日齢4の新生児へのオセルタミビルの使用経験
神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学 森岡一朗
24. 当院小児科における過去5年間の感染症サーベイランスの結果について
兵庫県立塚口病院 小児科 大西聡
25. ステロイドパルス療法が奏効したマイコプラズマ肺炎の1例
公立豊岡病院 小児科 横田知之
26. 高サイトカイン血症の存在が疑われたマイコプラズマ肺炎にメチルプレドニゾロンが著効を示した1例
小野市民病院 小児科 立花麻梨亜

第5グループ (16:14~16:56)

座長 濱平陽史

27. マイコプラズマ肺炎が契機になったと考えられる不全型川崎病の1例
濟生会兵庫県病院 小児科 松野下 夏 樹
28. エルシニア感染が関与したと思われる川崎病の1例
加古川市民病院 小児科 中 尻 智 史
29. γ グロブリン(IVIG)不応の川崎病乳児例(生後3か月)に血漿交換を施行し奏効した1例
兵庫県立塚口病院 小児科 高 原 賢 守
30. 完全房室ブロックをきたした急性心筋炎の1例
兵庫県立こども病院 循環器科 田 村 彰 広
31. ターナー症候群における大動脈弁上拡張の評価
兵庫県立こども病院 代謝内分泌科 奥 野 美佐子
32. 小児急性細気管支炎における非侵襲的陽圧換気療法の検討
神戸市立医療センター中央市民病院 小児科 米 本 大 貴

第6グループ (16:56~17:38)

座長 白石英幸

33. 保育所・幼稚園における肥満予防の実態と職員の意識に関するアンケート調査
兵庫県医師会 乳幼児保健委員会 藤 田 位
34. 兵庫県における小児救急に関する保護者意識調査
兵庫県小児科医会 救急対策委員会 日 野 利 治
35. 2008年保護者小児救急意識調査における自由記載意見
兵庫県小児科医会 救急対策委員会 日 野 利 治
36. 連続脳波モニタリングでてんかん重積状態が明らかとなった急性脳症疑いの1例
兵庫県立こども病院 脳神経内科 永 瀬 裕 朗
37. HHV-6による痙攣重積型脳症と薬剤性過敏症症候群の1例
神鋼加古川病院 小児科 谷 中 好 子
38. 家族性片麻痺性片頭痛の1家族例
小野市民病院 小児科 安 島 英 裕

1. MRI拡散強調画像で典型的な画像所見を呈した重症新生児低血糖の1例

兵庫県立こども病院周産期医療センター 新生児科

○猪俣 慶、浅野貴大、山下達也、上田雅章、坂井仁美、吉形真由美、
溝渕雅巳、芳本誠司、中尾秀人

症例は正期産の男児。日齢2に無呼吸発作頻発するため新生児搬送となった。入院時に血糖値14mg/dlと低血糖認めため糖輸液開始、糖投与速度15mg/kg/分まで増量を要した。日齢9の頭部MRI拡散強調画像で重症新生児低血糖に特徴的な頭頂後頭葉皮質、皮質下白質に高信号域を認めた。本症例では入院中に痙攣発作を繰り返しており、退院後の慢性期にも部分発作を繰り返している。本症例について若干の文献的考察を加え報告する。

diffusion MRI, hypoglycemia, hyperinsulinemia, epilepsy

2. 最近経験した非D Rh不適合による早発溶血性黄疸の2例

加古川市民病院 小児科

○小寺孝幸、大西徳子、岡野真理子、中尻智史、波多野史子、小林光郎、
松村愛可、山内 淳、上村裕保、親里嘉展、海老名俊亮、西山敦史、
神岡一郎、湊川 誠、森沢 猛、足立昌夫、伊東利幸、村瀬真紀、
石田明人

症例1) 37週2,634g男児。母体抗C, e抗体陽性。早発黄疸にて光線施行も改善せず、生後62時間に当院搬送。TB25.8、UB1.63、交換輸血にて軽快。

症例2) 40週2,320g女児。母体抗E, c抗体陽性。早発黄疸で、生後12時間で当院搬送。TB8.7、UB0.18、輸液、光線療法、 γ グロブリンにて軽快。非D不適合溶血性黄疸の中には重症化するものもあり、注意を要する。文献的考察と併せて報告する。

early hemolytic jaundice of the newborn, Rh (not D) blood group incompatibility

3. 胎便性イレウスに対して穿孔前腸瘻造設を行った重症子宮内胎児 発育遅延児

兵庫県立こども病院周産期医療センター 新生児科

○山下達也、浅野貴大、猪俣 慶、上田雅章、坂井仁美、吉形真由美、
溝渕雅巳、芳本誠司、中尾秀人

症例は33週0日452gで二絨毛膜性双胎の第2子として帝王切開で出生した男児。日齢3まで便の排泄を認めず、胎便性イレウスを合併した。ガストログラフィン胃内注入、ガストログラフィン注腸を行ったが無効。日齢5に腸管穿孔の危険性を考慮して腸穿孔前に腸瘻造設術を施行し、以後の栄養管理を行っている。胎便性イレウスに対して穿孔前に腸瘻造設を行うことは、重症FGR児の救命のためのひとつの選択枝と考えられた。

fetal growth restriction (FGR), meconium ileus, enterostomy

4. 日齢14に発症した新生児甲状腺機能亢進症の1例

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学¹⁾、現 高槻病院²⁾

○長坂美和子¹⁾²⁾、藤岡一路¹⁾、森川 悟¹⁾、三輪明弘¹⁾、柴田暁男¹⁾、
森岡一朗¹⁾、横山直樹¹⁾、松尾雅文¹⁾

症例はバセドウ病母体より出生した男児。母親の甲状腺機能は妊娠中プロピルチオウラシルにて正常範囲内であったが、分娩前の抗TSH受容体抗体（TRAb）が9.2 IU/lであった。児は出生後異常なかったが、日齢14に170bpm台の頻脈と体重増加不良が出現、持続した。臨床経過と血液検査より新生児甲状腺機能亢進症と診断した。TRAb高値で抗甲状腺薬内服中のバセドウ病母体より出生した児では、生後数週間で発症する場合があります。注意を要する。

neonatal hyperthyroidism, TSH-receptor antibody

5. 新生児期に発生したMRSA 骨髄炎の1例

加古川市民病院 小児科

○波多野史子、大西徳子、岡野真理子、小寺孝幸、中尻智史、小林光郎、
松村愛可、山内 淳、上村裕保、海老名俊亮、西山敦史、親里嘉展、
神岡一郎、湊川 誠、森沢 猛、足立昌夫、伊東利幸、村瀬真紀、
石田明人

症例は生後23日の男児。発熱、左上肢の自発運動低下を認め入院した。左前腕の腫脹と熱感が出現し、MRIで橈骨周囲の膿瘍を認め、穿刺吸引とPAPM/BPの投与を行った。しかし血液検査上改善に乏しく、VCMを追加したところ炎症反応は改善した。穿刺液よりMRSAを検出し、入院15日目の単純X線で橈骨の病的骨折を認めためMRSAによる骨髄炎と診断した。新生児期の骨髄炎について文献的考察を加えて報告する。

osteomyelitis, MRSA, neonate

6. 心房粗動停止後に多源性心房頻拍を呈した非免疫性胎児水腫の1例

兵庫県立こども病院周産期医療センター 新生児科

○小川禎治、浅野貴大、坂井仁美、上田雅章、吉形真由美、溝渕雅巳、
芳本誠司、中尾秀人

胎児不整脈と胎児水腫のため、妊娠32週時に緊急母体搬送となり、帝王切開にて出生した症例。出生体重は2,496g、ApSは8点/9点であった。心機能低下、心拡大を認めた。心奇形は無かった。心電図にて心房粗動と診断。心室収縮回数は230～260回/分であった。ジゴキシン静注後、日齢1には心房粗動は停止したが、洞調律とはならず、多源性心房頻拍となった。以後、心室収縮回数は減少傾向である。

atrial flutter, hydrops, multifocal atrial tachycardia

7. 新生児期より観察したSotos症候群の2例

兵庫医科大学病院 小児科

○三崎真生子、矢藤慎也、西山久美子、樋上敦紀、磯野員倫、小川智美、
皆川京子、服部益治、谷澤隆邦

Sotos症候群は特異顔貌、過成長、精神発達遅滞を特徴とする先天性疾患である。そのなかには主症状である過成長に乏しく、多彩な症状のため、診断に苦慮する例も報告されている。今回我々は新生児期に明らかな過成長を認めなかったが、原因不明の低血糖・尿路性器異常・心奇形等の治療を要し、その後の経過で、主要症状が顕在化し、遺伝子検査にてSotos症候群と確定診断した2例を経験したので、若干の文献学的考察を加えて報告する。

Sotos syndrome, NSD1, overgrowth, mental retardation

8. 小児Helicobacter pylori感染症の非侵襲的検査の有用性

社会保険神戸中央病院 小児科

○加納 原、田中香織、宇宿智裕、坂本 泉

当院で過去5年間にHelicobacter pylori (Hp) 感染症検査を行った75例について臨床像を検討した。適応は反復性腹痛、鉄欠乏性貧血、慢性ITPで、年齢は1～15歳、男女差はなかった。血中IgG抗体価と尿素呼気試験の結果からHp感染と診断されたのは8例で、このうち2例は上部消化管透視または内視鏡で潰瘍所見を認めた。除菌療法は5例で施行したが、2例で二次治療を要した。以上の結果から非侵襲的検査の有用性について考察を行う。

Helicobacter pylori, urea breath test, iron deficiency anemia,
idiopathic thrombocytopenic purpura

9. 潰瘍性大腸炎劇症型に対してステロイドパルス及び白血球除去療法を施行し外科手術を回避して軽快退院した1例

兵庫県立塚口病院 小児科¹⁾、同 小児外科²⁾、同 消化器科³⁾、
現 兵庫県立こども病院⁴⁾

○田中裕也¹⁾⁴⁾、高原賢守¹⁾、丸茂智恵子¹⁾、制野勇介¹⁾、竹下佳弘¹⁾、
飯尾 潤¹⁾、木村祐次郎¹⁾、前田真治¹⁾、松本貴子¹⁾、芥川 宏¹⁾、
野中路子¹⁾、毎原敏郎¹⁾、平尾敬男¹⁾、中條 悟²⁾、片山哲夫²⁾、
岡本朋子³⁾

小児期発症の潰瘍性大腸炎は重症例や急速進行例が多く、内科的治療では寛解導入が困難となることもある。特に劇症型では成人領域でも治療への反応性不良や重篤な合併症のために急性期に外科治療が必要となる例が少なくない。今回我々は潰瘍性大腸炎劇症型に対しステロイドパルス療法及び白血球除去療法を施行して寛解導入・維持に成功し、手術を要さず軽快退院した14歳女児例を経験したため、文献的考察を加えて報告する。

ulcerative colitis, fulminant colitis, leukocytapheresis (LCAP), steroid pulse therapy

10. 当院における胃食道逆流症例の検討

姫路赤十字病院 小児科、同 小児外科¹⁾

○山本暢之、植村加奈子、二階堂量子、山本寛子、北山路子、岸田 真、
西山将広、李 知子、伴 紘文、高見勇一、柄川 剛、高橋宏暢、岸本芽子、
濱平陽史、五百蔵智明、久呉真章、畠山 理¹⁾、大片祐一¹⁾

小児胃食道逆流症(以下GERD)は様々な要因で発生し、その症状も哺乳性チアノーゼ・無呼吸発作・肺炎・喘鳴など多彩である。症状が多彩であるが故に当初は難治性感染症や難治性気管支喘息として経過観察とされ、治療に難渋し入退院を繰り返すことも少なくない。今回我々は当院でのGERD症例における受診時の症状・主訴・経過などについてまとめたので、これを報告する。

gastroesophageal reflux disease, asthmatic attack, pneumonia, cyanosis

11. 肉眼的血尿にて発症した腎原発悪性リンパ腫の1例

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学、同 泌尿器科¹⁾、
同 病理診断科²⁾

○久保川育子、石森真吾、大坪裕美、下竹敦哉、豊嶋大作、光田好寛、
森 健、早川 晶、村蒔基次¹⁾、三宅秀明¹⁾、藤澤正人¹⁾、伊藤智雄²⁾、
竹島泰弘、松尾雅文

症例は12歳女児。肉眼的血尿と腰痛を認め近医を受診、腹部超音波検査にて右腎腫瘍を認めた。腎腫瘍疑いにて当院を紹介され右腎摘術を施行、病理組織検査で大型異型リンパ球様細胞のび慢性増殖を認め、CD20、bcl-2、bcl-6陽性であり、悪性リンパ腫（び慢性大細胞型）と診断した。小児の肉眼的血尿の原因は多くが外傷、感染、結石、腎炎等非腫瘍性疾患であるが、稀に悪性腫瘍を認めるため、診療初期より超音波検査を行うことが重要である。

gross hematuria, kidney tumor, malignant lymphoma

12. 溶血性尿毒症症候群発症8年後より高度蛋白尿を呈し、糸球体硬化および著明な間質の線維化を認めた1例

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学

○橋村裕也、神田杏子、貝藤裕史、野津寛大、飯島一誠、松尾雅文

症例は14歳女性。3歳時に溶血性尿毒症症候群（HUS）を発症、約1ヵ月間腹膜透析治療を要した。発症4ヵ月後の腎生検で一部に皮質壊死を認めた。速やかに腎機能は正常化し、発症1年後には尿所見も正常化した。発症8年後より蛋白尿を認め次第に増悪した。発症11年後の再生検で、糸球体硬化、間質の線維化を広範に認め今後の腎機能障害が予想された。腎機能・尿所見が正常化したHUS症例においても長期の経過観察が必要である。

hemolytic uremic syndrome, proteinuria, long-term prognosis

13. 点滴漏れにより皮膚壊死をきたした1例

姫路聖マリア病院 小児科、神戸百年記念病院 小児科¹⁾、まき小児科²⁾

○桑村紀子、玉置依子¹⁾、加古真紀²⁾、池本裕実子、河田知子

1歳4か月男児。輸液の血管外漏出により著明な皮膚壊死をきたした。当時使用していたのは通常の維持輸液製剤であったが、壊死は皮下組織まで及び3か月後の現在も瘢痕萎縮を残している。日常起こりえる点滴漏れからも重篤な皮膚障害に至ることは周知されるべきである。本症例の経過に加え、血管外漏出による皮膚障害についての概論、対応法なども併せて報告する。

skin necrosis, infiltration of intravenous fluid, iatrogenic disorder

14. 任意予防接種に関するアンケート調査

兵庫県小児科医会 感染症対策委員会

○八若博司、吉田元嗣、田中一宏、江原伯陽、芥川 宏、安部治郎、岡藤隆夫、梶山瑞隆、小林 謙、多木秀雄、筒井 孟、三木和典、三根一乗、山本まゆみ

任意予防接種に対する小児科医の関心度を把握するため、アンケート調査を行った。ムンプス、水痘、インフルエンザに関しては約半数が積極的に推奨していたが、推奨しない理由としては健康被害に対する補償が不安、副反応が不安、接種料金が高額という回答が得られ、Hibでは安定供給を不安視する回答が得られた。接種率向上のためには健康被害に対する補償の充実、接種料金の補助、定期接種化への働きかけが必要である。

voluntary vaccination

15. 水痘ワクチンの効果に関する報告 —保育施設内での水痘のアウトブレイクの経験から—

片山キッズクリニック

○宮田一平、片山 啓

当院併設の認可外保育施設において、一時預り児による持ち込みを端緒とした水痘のアウトブレイクを経験した。水痘ウイルスに曝露されたと考えられた30名の内訳は、水痘既往者2名、ワクチン既往者13名、いずれの既往も無い者（感受性者）が15名であった。曝露を受けた感受性者に関しては保護者に説明の上、希望者には水痘ワクチンの緊急接種をおこなった。その後、全ての児の経過を追跡して得られた知見を紹介する。

varicella outbreak, vaccine efficacy

16. 卵アレルギー 1歳0か月児に安全かつ確実にMRワクチン接種を受けてもらうために

神戸市立医療センター中央市民病院 小児科

○清水滋太、岡藤郁夫、田中麻希子、米本大貴、吉田健司、廣田篤史、
宮越千智、岸本健治、田村卓也、田場隆介、宇佐美郁哉、山川 勝、
富田安彦、春田恒和

我が国のMRワクチン中の卵白アルブミン成分の混入は微量であり、重篤なアレルギー反応を呈する可能性は極めて少ないが、極端に過敏な卵アレルギー児ではどうかは不明である。今回我々は平成20年8月より1歳0か月の時点で卵制限を受けている乳児で卵黄のオープン食物負荷試験で結果を確認した上で、翌日にMRワクチン接種を行う試みを施行している。平成21年3月まで16人の対象があり安全に行えており、報告する。

food allergy, MR vaccine

17. 食物負荷試験中にアナフィラキシーショックを呈しエピペンで救命しえた1例

兵庫県立こども病院 アレルギー科 救急科

○安部信吾、田中裕也、中岸保夫、三好麻里、上谷良行

8歳男児。1歳、6歳時に卵白によるアナフィラキシーの既往2回。外来で食物負荷試験を進め、7歳10ヶ月時には加熱卵黄1個分を摂取可能であった。加熱全卵1/8個分を負荷したところ、60分後に腹痛、喘鳴が出現。観察室に移動させたところ、意識消失、脈拍触知不能となった。直ちにエピペンの筋注と輸液負荷を行い5分後に意識回復、収縮期血圧が正常に復した。県内でのエピペンの使用例は少なく、本症例を報告する。

food allergy, anaphylaxis, auto-injector

18. 未就学児に負荷試験で確定した食物依存性運動誘発アナフィラキシーの1例

神鋼病院 小児科、兵庫県立こども病院 免疫アレルギー科¹⁾

○梶山瑞隆、木藤嘉彦、三好麻里¹⁾

症例は6歳男児で、食後に運動するとアナフィラキシーを起こすため食物依存性運動誘発アナフィラキシー (FEIAn) を疑われ、負荷試験目的で当院に紹介受診。小麦を摂取後に運動負荷を行うと蕁麻疹を認め、小麦摂取や運動のみでは症状が誘発されなかったためFEIAnと診断した。10~20歳代に初発のピークがあるまれな疾患であるが、未就学児の報告はさらにまれである。アナフィラキシーを繰り返したり、不要な食事・運動制限がなされることもあるため本疾患を疑い確定診断を行う必要があると考えた。

food-dependent exercise-induced anaphylaxis (FEIAn), preschool child,
food and exercise challenge test

19. トシリズマブ投与中に感染症を反復した全身型若年性特発性関節炎の1例

兵庫県立こども病院 リウマチ科

○中岸保夫、田中裕也、安部信吾、笠井和子、三好麻里

10歳男児。2000年に全身型若年性特発性関節炎と診断され、2002年よりトシリズマブ（TCZ）の定期投与を開始し、関節炎のコントロールは良好。2009年3月までに肺炎で入院加療を5回要した。身体所見、血液検査では異常所見が乏しく画像検査で肺炎と診断される場合が大半であった。TCZは感染症に伴う炎症反応も抑制するため、軽微な症状でも画像検査を含めた感染症スクリーニングが必要である。

systemic juvenile idiopathic arthritis, tocilizumab, infection, IL-6

20. 当院で経験した新型インフルエンザ小児例

神戸市立医療センター中央市民病院 小児科

○宮越千智、田中麻希子、米本大貴、廣田篤志、吉田健司、岸本健治、清水滋太、田村卓也、田場隆介、岡藤郁夫、宇佐美郁哉、山川 勝、富田安彦、春田恒和

平成21年5月16日、神戸市において国内初の新型インフルエンザ患者が確認され、休校や発熱外来設置など、市民生活や診療体制への影響は多大であった。当院においても新型インフルエンザ感染小児を6例経験した。新型インフルエンザ小児例の臨床像について、当院で経験した成人例との比較も含め検討し報告する。

swine flu, child

21. 西神戸医療センターにおける新型インフルエンザ対応の経過報告

西神戸医療センター 小児科

○上村克徳、内田佳子、井上珠希、岩田あや、由良和夫、仁紙宏之、松原康策、
深谷 隆

2009年5月16日に神戸市で国内初の新型インフルエンザ感染例3例が報告されて以降、当院では神戸市内発生事例について、神戸市の行動計画の下に対応を行った。地域中核病院小児科として、発熱外来と一般小児科外来・救急外来体制の並存、ベッドコントロール、職員院内感染対策、周辺団体・医療機関との協働などをまとめ、今後予測される第二波への対応についての提言を含め報告する。

A/H1N1, ICT

22. 新型インフルエンザアウトブレイク第1週の小児科医院における 外来診療の実情

片山キッズクリニック

○宮田一平、片山 啓

神戸市灘区にある当施設における新型インフルエンザアウトブレイク第1週の患者の受診動向を分析した。神戸市は当初、発熱患者に対して発熱相談センターへ電話で相談し直接医療機関を受診しないように呼びかけ、蔓延に伴って方針を変更した。しなしながら、市の方針の変更は特に患者の受診動向には大きな影響を与えず、受診患者の77.1%が発熱・急性呼吸器症状を主訴とした受診であったことが判明した。

novel influenza, outbreak, precaution

23. 新型インフルエンザ発症の母親と濃厚接触した日齢4の新生児へのオセルタミビルの使用経験

神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学¹⁾、
神戸大学大学院医学研究科外科系講座 産科婦人科学²⁾、
神戸大学医学部附属病院 感染制御部³⁾

○森岡一朗¹⁾³⁾、森實真由美²⁾、橋本総子¹⁾、齋藤敦郎¹⁾、森川 悟¹⁾、
三輪明弘¹⁾、柴田暁男¹⁾、阿部泰尚³⁾、吉田弘之³⁾、李 宗子³⁾、横山直樹¹⁾、
荒川創一³⁾、山田秀人²⁾、松尾雅文¹⁾

米国CDCは新型インフルエンザ（Flu）の流行に際し、治療として生後3ヶ月未満の乳児へのオセルタミビルの使用を緊急に認めた。今回、新生児にオセルタミビルを投与した例を経験したので報告する。症例は新型Flu発症の母親と濃厚接触した日齢4の成熟児。軽度呼吸障害、Flu簡易検査弱陽性を認め、日齢4よりオセルタミビルを投与した。副作用の出現もなく、無事軽快退院となった。

novel influenza A (H1N1) virus, oseltamivir, newborn

24. 当院小児科における過去5年間の感染症サーベイランスの結果について

兵庫県立塚口病院 小児科、
兵庫県立健康生活科学研究所 健康科学研究センター¹⁾

○大西 聡、平尾敬男、野中路子、芥川 宏、毎原敏郎、松本貴子、前田真治、
木村裕次郎、飯尾 潤、高原賢守、丸茂智恵子、川崎英史、榎本美貴¹⁾、
押部智宏¹⁾

当院は感染症の定点把握施設に指定されており、一定の基準を設けて兵庫県立健康環境科学研究所に検体を提出している。今回われわれは、当院小児科を受診した患児において判明した各種感染症の結果について過去5年間の発生動向を検討し、無菌性髄膜炎、インフルエンザ、呼吸器感染症、腸管感染症などに分類して報告する。

infant, infection, surveillance, virus

25. ステロイドパルス療法が奏効したマイコプラズマ肺炎の1例

公立豊岡病院 小児科

○横田知之、中本裕介、前納万里、山本哲也、木寺えり子、港 敏則、
吉田真策

症例は3歳女児。持続する発熱、咳嗽のため入院。胸部Xpで右下肺野に浸潤影、血液検査でマイコプラズマ抗体の上昇(80→640倍)を認め、マイコプラズマ肺炎と診断。第5病日よりABPC/SBTとAZMで治療開始したが、効果はなく、肺炎像は増強した。MINO、EMでも改善は得られず、胸水貯留も増加し、努力呼吸も認めたため、ステロイドパルス療法を施行し、軽快した。若干の文献的考察を加え報告する。

Mycoplasma, pulse steroid

26. 高サイトカイン血症の存在が疑われたマイコプラズマ肺炎にメチルプレドニゾロンが著効を示した1例

小野市民病院 小児科

○立花麻梨亜、加藤 威、木花咲子、安島英裕、奥村知子、宅見 徹、
藤井栄一

症例は6歳男児。アジスロマイシン、ミノサイクリンに反応なく、発熱が遷延した。汎血球減少は認めないものの、AST、ALT、LDH、血清フェリチン、尿中β2ミクログロブリンの著明な上昇を認めた。マイコプラズマ感染により炎症性サイトカインの産生が増加したものと考え、サイトカインストームに対しメチルプレドニゾロンを使用したところ著効を示した。若干の文献的考察を加え報告する。

Mycoplasma pneumonia, cytokine, systemic inflammatory response syndrome

27. マイコプラズマ肺炎が契機になったと考えられる不全型川崎病の1例

済生会兵庫県病院 小児科

○松野下夏樹、早野克典、沖田 空、岡ゆかり、立石 径、山根正之、
竹中尚美、狐塚善樹

川崎病は原因不明の症候群であるが各種感染症に伴って発症した報告が散見される。マイコプラズマ感染に伴った川崎病は稀であり、本邦では約20例の報告がある。通常の川崎病と比べ発症年齢が高く、主要症状の出現が遅いなどの特徴があり、冠動脈病変合併の危険性が高いとされる。今回我々はマイコプラズマ肺炎が契機になったと考えられる不全型川崎病に対して、IVIg投与にて心合併無く改善した一例を経験したので報告する。

Mycoplasma pneumoniae, Kawasaki disease

28. エルシニア感染が関与したと思われる川崎病の1例

加古川市民病院 小児科

○中尻智史、波多野史子、松村愛可、山内 淳、親里嘉展、西山敦史、
神岡一郎、足立昌夫、小寺孝幸、岡野真理子、大西徳子、小林光郎、
上村裕保、海老名俊亮、湊川 誠、森沢 猛、伊東利幸、村瀬真紀、
石田明人

症例は10歳の男児。頸部リンパ節腫脹を除く診断基準5/6項目を満たし、川崎病と診断した。免疫グロブリン投与にて速やかに症状は軽快したが冠動脈の著明な拡張をきたし、造影検査の結果抗凝固療法を要した。本例では入院時のエルシニア抗体が陽性と判明し川崎病症状との関連が示唆された。

MCLS, giant coronary aneurysm, *Yersinia* infection

29. γ グロブリン (IVIG) 不応の川崎病乳児例 (生後 3 か月) に血漿交換を施行し奏効した 1 例

兵庫県立塚口病院 小児科、同 小児外科¹⁾、
兵庫県立尼崎病院 小児循環器科²⁾

○高原賢守、丸茂智恵子、制野勇介、田中裕也、竹下佳弘、飯尾 潤、
木村祐次郎、前田真治、松本貴子、芥川 宏、野中路子、毎原敏郎、
平尾敬男、中條 悟¹⁾、片山哲夫¹⁾、坂崎尚徳²⁾

川崎病の IVIG 不応例は初回投与例の 10–20% を占める。その中でも特に乳児例やリスク因子をもつ場合は巨大冠動脈瘤形成のハイリスク群となり追加治療にも不応となる可能性が高い。当院では基準を設けて追加のステロイド治療にも不応が予測される症例には第 10 病日までに血漿交換療法を施行している。今回生後 3 カ月の川崎病乳児例に対して 2 回の IVIG 後に血漿交換療法を施行し奏効したため文献的考察を加えて報告する。

Kawasaki disease, plasma exchange therapy, IVIG resistance

30. 完全房室ブロックをきたした急性心筋炎の 1 例

兵庫県立こども病院 循環器科

○田村彰広、田中 聡、小川禎治、佐藤有美、富永健太、齋木宏文、藤田秀樹、
田中敏克、城戸佐知子

症例は 14 歳女児。急性心筋炎のため第 2 病日に当院へ搬送。第 5 病日に、完全房室ブロックから心静止をきたした。緊急ペーシングにより循環動態は安定したが、心室細動をおこすなど、電氣的に不安定であった。完全房室ブロックは 2 日で改善し、ペースメーカーより離脱した。急性心筋炎にともなう完全房室ブロックは小児では稀であるが、心収縮能が保たれていても、緊急対応が可能な状況下で慎重に観察する必要がある。

acute myocarditis, complete atrioventricular block, asystole, pace maker

31. ターナー症候群における大動脈弁上拡張の評価

兵庫県立こども病院 代謝内分泌科、同 循環器科¹⁾、同 放射線科²⁾、
国立循環器病センター 放射線診療部³⁾

○奥野美佐子、米倉圭二、尾崎佳代、郷司克己、城戸佐知子¹⁾、赤坂好宣²⁾、
橋村宏美³⁾

ターナー症候群では青年期以降に解離性大動脈瘤を発症することがあり、本症における死亡率を高める一因となっている。この解離性大動脈瘤には、先天性心疾患の他、青年期以降で発症する大動脈弁上拡張や高血圧の関与が指摘されている。今回我々は、15歳以上のターナー症候群20例を対象に胸部MRIを施行し、大動脈病変に関する評価を行った。その結果、少なくとも1例に明らかにハイリスクと考えられる所見を認めた。

Turner syndrome, aortic root dilatation

32. 小児急性細気管支炎における非侵襲的陽圧換気療法の検討

神戸市立医療センター中央市民病院 小児科

○米本大貴、田村卓也、田中麻希子、廣田篤史、吉田健司、岸本健治、
宮越千智、清水滋太、田場隆介、岡藤郁夫、宇佐美郁哉、山川 勝、
富田安彦、春田恒和

今回われわれは、小児急性呼吸不全の代表的疾患の一つである急性細気管支炎に対し非侵襲的陽圧換気療法（NPPV）を用いた呼吸管理を行い、その有用性を検討したので報告する。全9症例（月齢0-10、平均3.8）で、開始後速やかに臨床症状、血液ガスともに改善した。圧損傷などの合併症は認めなかった。脆弱な乳児の呼吸管理において、気管内挿管を回避し得る意義は大きく、NPPVは有用な治療戦略と思われた。

NPPV, bronchiolitis, respiratory management

33. 保育所・幼稚園における肥満予防の実態と職員の意識に関するアンケート調査

兵庫県医師会 乳幼児保健委員会

○藤田 位、会田道夫、辰巳和人、谷口賢蔵、土屋早苗、野間大路、西尾利一

兵庫県内の保育所・幼稚園175施設を対象に肥満予防の実態と職員の意識に関するアンケート調査を行った。

【結果】①成人肥満の始まりが幼児期にあり、その予防を幼児期から始めることの重要性についてはほとんどの職員が認識していた。②肥満予防に既に取り組んでいる保育所・幼稚園は57%であった。③肥満予防の指導に対する職員の意欲は非常に高く、内容を選べば全ての保育所・幼稚園で実施することが可能と考えられた。

health education, prevention against obesity

34. 兵庫県における小児救急に関する保護者意識調査

兵庫県小児科医会 救急対策委員会

○日野利治、橋本 寛、上谷良行、服部益治、松浦伸郎、竹島泰弘、坂本 泉、辰巳和人、大橋玉基、毎原敏郎、酒井國安、小林 謙、深谷 隆、相原浩輝、中迫博英、平瀬明彦、藤井栄一、前田衛作、村上龍助、山川 勝、吉田真策、山崎武美、熊谷直樹

我々は2000年に兵庫県下における小児救急に関する保護者意識調査を行い第223回地方会にて報告した。今回8年を経て再度、同様の調査を行った。回収したのは4,232通で、こどもの年齢は0歳から6歳が大半を占めた。前回の調査と比較して保護者の意識には大きな変化は見られず、小児救急の充実を求める声に変わりはない。病院小児科の集約化について、近くの病院小児科が無くなる場合は7割の保護者が反対と回答した。#8000を知っているのは36%であった。

pediatric emergency, questionnaire survey

35. 2008年保護者小児救急意識調査における自由記載意見

兵庫県小児科医会 救急対策委員会

○日野利治、上谷良行、橋本 寛、服部益治、松浦伸郎、竹島泰弘、坂本 泉、辰己和人、大橋玉基、毎原敏郎、酒井國安、小林 謙、深谷 隆、相原浩輝、中作博英、平瀬明彦、藤井栄一、前田衛作、太田國隆、村上龍助、山川 勝、吉田真策、山崎武美、熊谷直樹

本委員会で昨年末行った保護者小児救急意識調査に於いて今の小児救急に関して自由記載の設問を行った所、4,232通の回答のうち760通（18%）で記載があった。これらの文から48種のキーワードを選び出しそれらの出現回数を調べた。キーワードは全体で1,049個見られ、それを10のカテゴリーに纏めて集計すると、受診方法に関するもの20%、医療体制に関するもの20%、医師の負担13%、救急医療の不満13%などが多かった

pediatric emergency, questionnaire survey

36. 連続脳波モニタリングでてんかん重積状態が明らかとなった急性脳症疑いの1例

兵庫県立こども病院 脳神経内科、同 救急集中治療科¹⁾

○永瀬裕朗、丸山あずさ、藤田杏子、中川 拓¹⁾、佐治洋介¹⁾、上谷良行¹⁾

症例は8歳女児。発熱翌日に近医にてインフルエンザB陽性。第3病日に痙攣が群発。急性脳症の疑いで当院PICUに転院。来院時には痙攣は認めなかったが、連続脳波モニタリング下で電氣的発作の群発を確認。脳波所見からてんかん重積状態と判断した。平温下でのバルビツレート昏睡療法を行い後遺症を残さず退院した。急性脳症の判断材料となる意識障害では電氣的発作が背景に隠れている場合があることが示唆された。

status epilepticus, acute encephalopathy, continuous EEG monitoring

37. HHV-6による痙攣重積型脳症と薬剤性過敏症症候群の1例

神鋼加古川病院 小児科、

兵庫県立こども病院 救急集中治療科¹⁾、同 脳神経内科²⁾

○谷中好子、三舛信一郎、井上真太郎、佐々木香織、上谷良行¹⁾、
三好麻里¹⁾、中岸保夫¹⁾、田村彰広¹⁾、永瀬裕朗²⁾

1歳男児、発熱と痙攣を主訴に入院。痙攣は第1・4病日に重積し、人工呼吸・ステロイドパルスなどの加療を行った。検査所見と経過よりHHV-6による痙攣重積型脳症と診断した。一旦解熱傾向となった後再び発熱し、第18病日より全身に小丘疹が広がり癒合し紅皮症となった。フェノバルブ投与しており好酸球増多・HHV-6血症とあわせ、薬物過敏症症候群と診断した。これらの経過につき若干の文献的考察を加え報告する。

HHV-6 (human herpesvirus-6), acute encephalopathy,
DIHS (drug-induced hypersensitivity syndrome)

38. 家族性片麻痺性片頭痛の1家族例

小野市民病院 小児科、国立病院機構松江病院 神経内科¹⁾、
鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設 脳神経内科²⁾

○安島英裕、加藤 威、立花麻梨亜、木花咲子、奥村知子、宅見 徹、
藤井栄一、足立芳樹¹⁾、竹島多賀夫²⁾

症例は13歳男児。左または右の片麻痺後に反対側の片頭痛を発症し、母、姉にも同様の片頭痛を認める。画像検査に異常なく、脳波は右Ocに1箇所棘波を認める。国際頭痛分類第2版により1.2.4家族性片麻痺性片頭痛と診断する。遺伝子解析では、CACNA1A、ATP1A2には変異を認めない。予防薬にシプロヘプタジン、ロメリジン、頓服薬にイブプロフェン、ドンペリドンを使用し、良好に経過している。

familial hemiplegic migraine (FHM), CACNA1A, ATP1A2

WAKODO

乳幼児用イオン飲料

アクアライト ORS

乳幼児の電解質・水分補給を新提案！

水分・電解質の吸収率を高めるため、浸透圧を200mOsm/Lと低くしています。

酸味を抑え、乳幼児が飲みやすいりんご風味です。

人工甘味料・保存料等は一切使用していません。



125mL×3個パック



乳幼児にとって理想的なバランスで電解質を補うことができます。
125mLの飲み切りサイズです。

和光堂株式会社 お客様相談室フリーダイヤル 0120-88-9283

●インターネットで和光堂情報を提供しています。http://www.wakodo.co.jp